

地下室の悪魔は語る。

// 架空の触覚は、同じ空想の怪物を許容する。

素晴らしいよ石杖所在。きみの左腕は、理想的な——”



-decoration
DD disorder
J the E.
奈須きのこ

骨の軋む、微かな音で目が覚めた。

夜半、目を覚ますと四肢の感覚を失っていた。

透明な蛹に倣う。意識が手の平サイズの小人になつて、脳の中に密閉されている。小人がどんなに手足を動かしたところで、眠る軀は動かさない。

唯一、左腕だけが閉じた意識と繋がっていた。脈打つ血潮を情報として感じ取る。一部分でしかないモノが、全体にとって変わっていく錯覚。左腕しか動かせない以上、石杖所在という存在は左腕に凝縮される。

「——、あ」

その左腕が、痛かった。

ゴリゴリという音が聞こえる。

全身が削られていく悪寒。

全体が咀嚼されていく快感。



自分が、淡々と食われていく実感。
左腕が消え去り、ようやく自由を取り戻す。暗闇で、まだハラハラと嚙り音がする。毛布をはぐ。ベッドの上は一面の赤。鼻から下を真っ赤に染めた少女が、砕けたアゴで微笑んでいた。

『——だって、お兄ちゃん苦しいでしょう?』

少女は、何かよくないモノに憑かれている。
ペロリと平らげられた左腕。痛みもなく、歯痕もない。少女は砕けたアゴで断面を舐める。喪われた者、大きな隙間を埋めるように。

それは骨の軋む幽かな夜。

花開くような、美しい命の音。

—— Junk the eater.

思い出した。これは夏の終わり、監獄みたいな病院からようやく退院して、大学に復学すべきが真剣に悩んでいた頃の話だ。

俺はそれなりに顔見知りのご近所さん、木崎さん宅にお邪魔していた。日の沈んだ夜の七時。呼び鈴も押さず挨拶もなしで、玄関から忍び込んだのだ。いや、ホントは窓でも叩き割るつもりだったのだが、玄関に鍵はかかってなかったのである。無用心め。こうなると誰が見たってガキのコン泥だが、困った事に本筋において間違えていない。ちょうど一ヶ月前の九月九日。この夜、俺は確かに金銭目当てで強盗まがいの不法侵入をしたのである。

なんでも、支倉坂で一家心中があったらしい。

報せを受けたのはもよりの交番のお巡りさん。朝一番たちは俺にもネタのお裾分けをしてくれたようで、昼間のうちに電話があったようだ。無駄話の内容なんざ覚えちゃいないが、着歴にはきっちり時間が記されている。ただいま午後六時四十分、日が沈む前にあった電話は二件、ツラヌイミハヤとカリョウカイエ。ツラヌイはどうでもいいとして、カイエの方は問題だ。携帯電話は大好きだが電話という行為は大嫌い、という変わり者が連絡してきただけで不吉である。

午後七時前。日が沈みきった後、三度目の電話があった。相手は非通知。間を取ってから電話に出る。話はこれ以上ないほど簡潔だった。男は木崎と名乗り、自宅の住所を口にして、

「申し訳ない。つかれたので払ってほしい」

そんな、本気で申し訳ねー台詞で電話を切った。

うっちゃって二度寝したかったが、無視できない理由が三つもある。

で木崎家の旦那から電話があったんだそうだ。

『昨夜、親子仲良く三人で首を絞めて自殺した。このままだと近所の方々に迷惑をかけるから、出来るだけ早く片付けにきてほしい』

性質の悪い冗談だ。が、不幸な事に連絡を受けた巡査はどのあたりが笑点なのか気付くセンスがなく、真つ正直に木崎宅に向かい、玉砕。それきり消息を絶ってしまつた。昼過ぎになって相棒を捜しにいったお巡りさんも同上。支倉坂二丁目の交番は半日もぬけのカラで、異状は警察署が知るより早くニュースとして伝播した。といってもローカルなネタなんで電波に乗る事はなく、あくまで近隣住民たちの噂話としてである。あらやだ、木崎さん家にお巡りさんが入ったきりできませんわよオホホ、とこどうして昨日つから閉めつきりなのかしらねオホホホ。細かいんだかズボラなんだか分からねえ奥様たちである。

そんな感じの噂話がご町内をゆっくりと潜航し、耳の早い物好きたちに知れ渡つたのが午後二時過ぎ。物好き

一つめ、机には大量のメモ用紙。カイエからの忠告だろう、今日一日の木崎家一家心中の顛末がメモつてある。二つめ、いま聞いた木崎さん家の住所。支倉坂二丁目四ノ七つて、うちの三軒隣りじゃねえかクソ。で、最後の三つめ。間の悪いコトに、今日はカイエの義手を借りっぱなしだった。お膳立ては完璧だ。うまくいけばマトさんから金一封がでるかもしれない。犯人逮捕に協力した一般人に金が振り込まれた、なんて話はてんで聞いた事がないが、それでも今後の扱いが少しは優しくなるかもと希望を抱いてみる。よし行こう。ザッと計算して期待値が労働値を上回りました。出かける前に一通りメモをチェックすると、ことさら重要そうに『目を見ると死ぬ』と赤ペンで書かれていた。

『目を見ると死ぬ』。凄いな、どこの怪談だよこれ。労働値、期待値をわずかに上回る。が、一度やる気になつた以上、部屋に戻るのも億劫だった。

そんな訳で木崎宅である。